6月22日のウクライナ情報

安斎育郎

❶ NATO 事務総長、ロシアの戦争支える中国に「経済的代償」検討すべきと（yahoo Japan，2024年6月18日）

スミ・ソマスカンダ、ティファニー・ワートハイマー　BBC ニュース

米ワシントン訪問中の北大西洋条約機構（NATO）のイェンス・ストルテンベルグ事務総長は BBC に対して、ウクライナに対するロシアの戦争を中国が支援し続けるならば、中国がどのような「経済的代償」を払うべきか、欧米諸国は検討すべきだと述べた。

ストルテンベルグ事務総長は、中国がロシアの戦争遂行を支援しながら、同時に欧州諸国との正常な関係を維持しようとしており、両方の「いいとこどりをしようとしている」と BBC の単独取材で述べた。

「こんなことは長期的にはうまくいかない」と、ストルテンベルグ氏は述べた。

事務総長は「中国が提供する超小型電子部品（マイクロエレクトロニクス）は、ウクライナで使うミサイルや武器をロシアが作るうえで不可欠」なものだが、「同時に中国は、欧州と NATO 同盟諸国との正常な経済関係を維持しようとしている」と指摘。

ロシアを支援する中国に NATO 加盟国はどう対応するのか質問されると、制裁の可能性について「話し合いを続けている」と事務総長は答え、「もし中国が行動の仕方を変えないのなら、いずれかの時点で、何らかの経済的代償を、私たちは検討すべき」だと述べた。

ストルテンベルグ氏は「ロシアは現在、各地の権威主義的な独裁指導者との関係を強めている」として、イラン、中国、北朝鮮との関係強化を指摘した。事務総長によると、北朝鮮はロシアに砲弾を送り、その見返りにロシアは北朝鮮のミサイルと核開発計画のため、先端技術を提供したという。

「つまり、ウクライナに対するロシアの侵略戦争を、北朝鮮が手助けしている」のだと、事務総長は述べた。

中国のロシア支援についてはすでにアメリカ政府が 5 月、中国と香港を拠点にする約 20 社を対象にした制裁を発表した。

中国はロシアとの経済関係について、人命を奪う武器を売却しているわけではないと主張し、「軍民両用技術の輸出は法や規制に沿って、慎重に取り組んでいる」と説明している。

欧米からの制裁が相次ぐなか、ロシアは中国、北朝鮮との関係を深めている。ウラジーミル・プーチン大統領は 5 月の中国訪問に続き、18 日には北朝鮮を訪れる。

■核兵器を持つ軍事同盟

ジョー・バイデン米大統領との会談に先立ち、ストルテンベルグ氏はまた、国防費を国内総生産（GDP）比 2%以上にするという NATO 目標を、加盟 31 カ国のうち 20 カ国以上が 2024 年に達成する見通しだと明らかにした。

「これはヨーロッパにとってもアメリカにとっても良いことだ。

ストルテンベルグ氏はさらに、ロシアや中国の脅威拡大への抑止力として NATO が配備可能な核弾頭の増加を検討しているかもしれないと、16 日付の英紙テレグラフで示唆したことについて、説明した。

この発言については、ロシア政府のドミトリー・ペスコフ報道官が「緊張をいっそう激化させる以外の何物でもない」と批判している。

こうした批判に対して事務総長は、自分の発言は、NATO が核兵器を持つ軍事同盟であって、ひとつの加盟国への攻撃は「同盟全体からの反応を引き起こす」という「一般論」を示したものに過ぎないと述べた。

「NATO の目的は戦争を戦うことではなく、戦争を防ぐことにある」と、ストルテンベルグ事務総長は話した。
（英語記事 China should pay for propping up Putin’s war - Nato chief）

https://news.yahoo.co.jp/articles/19d629e6426af143d69294d98e30dfa2216f1b46/images/000

❷ プーチンが 4 州割譲を求める最後通告、「完全勝利」目指すウクライナが迫られる「譲歩」の現実（yahoo Japan, 2024年6月18日）

（国際ジャーナリスト・木村正人）

■ プーチン「4 州からウクライナ軍を撤退させよ」

［ロンドン発］ウラジーミル・プーチン露大統領は 6 月 14 日「本日、私たちは具体的で真の和平提案を行う。キーウと西側が拒否するなら流血を継続させることになる。戦況はキーウに有利にならないよう変化し続けるだろう」との考えを示した。

「われわれは紛争を凍結させるのではなく、紛争を最終的に終結させる話をしている。ドネツク、ルハンスク、ザポリージャ、ヘルソン地域からのウクライナ軍の完全撤退に同意し、このプロセスを開始すれば、われわれは遅滞なく交渉を開始する用意がある」

“プーチン・ドクトリン”はウクライナの中立・非同盟・非核、非武装化、非ナチ化だ。クリミア、ドネツク、ルハンスク、ザポリージャ、ヘルソンはロシアの構成主体とした上で「ウクライナでロシア語を話す市民の権利、自由、利益は完全に確保されなければならない」と牽制した。

一方、イタリア南部プーリア州で開かれた G7 サミット（主要 7 カ国首脳会議）は同日、制裁で凍結されたロシアの資産を活用してウクライナへ約 500 億ドルの新たな支援を行うと首脳宣言に明記し、中国がロシアを支援していることに深い懸念を表明した。

■ ロシア専門家「モスクワは譲歩しない」

スイスで 15～16 日、ウクライナのウォロディミル・ゼレンスキー大統領の和平案を協議する「世界平和サミット」が開かれ、90 カ国・地域が参加する。ジョー・バイデン米大統領の代わりにカマラ・ハリス副大統領が出席し、中国は参加を辞退した。ロシアは招待されていない。

ロシアに詳しいカーネギー国際平和財団ロシアユーラシア研究センターのタチアナ・スタノバヤ上級研究員は X（旧ツイッター）への投稿で「これは和平案ではない。敵対行為の停止と引き換えに西側とウクライナに最大の要求を突きつけている。モスクワは譲歩しない」と解説する。

「和平案は 15 日から始まる平和サミットにぶつけて発表され、その意義を貶める狙いがある。率直に言って失敗に終わっている平和サミットにプーチンがなぜそこまでこだわるのか、疑問に思う人もいるだろう」。実際、約 160 カ国・地域を招待したサミットの出席率は 6 割弱だ。

スタノバヤ上級研究員は「『時間はプーチンに利する』という一般的な見方とは逆に、ロシアは来年、軍事的優位性を失う可能性がある。現在の優位性を不可逆的なものにするために“和平プロセス”を通じてウクライナでのロシアの軍事的優位性を早急に強化する必要がある」という。

■ 平和サミットは世界的に反ロシア包囲網を固める試み

「クレムリンは平和サミットについて世界的に反ロシア包囲網を固める試みとみなして、これを阻止する決意を固めている。プーチンの和平案は本質的にウクライナの降伏を要求しており、ゼレンスキー大統領を排除するものだ」(スタノバヤ上級研究員)

ウクライナがドネツク、ルハンスク、ザポリージャ、ヘルソン 4 州とクリミアを放棄して中立を宣言、ウクライナ民族主義者(反ロシア勢力)が権力の座に就かないことを約束すれば、戦争を終結させるとプーチンは提案している。ゼレンスキー大統領が絶対にのめるはずがない提案だ。

「プーチンは長い間、幅を持たせるため要求の内容を明確にするのを避けてきた。今回、要求を発表したことで逆に今後の交渉の可能性を複雑にしてしまった。ウクライナが要求をすぐに受け入れるとロシア国民が本気で思っているかは疑わしい」(スタノバヤ上級研究員)

ウクライナから強力な反撃があればプーチンは攻撃を中止するかもしれない。プーチンは腹の中で、大きな軍事力を投入することなくウクライナを降伏させ、ゼレンスキー大統領が退陣に追い込まれる状況を作り出したいと考えているとスタノバヤ上級研究員はみる。

■ ウクライナを“交渉”に引きずり込んで不安定化させる

「プーチンの当面の目標はウクライナを“交渉”に引きずり込んで不安定化させ、将来キーウがロシアの要求を受け入れるようにすることだ。そうすればロシアは軍事行動を継続する必要がなくなる。和平案には即時和平を望む人々を惹きつけ、西側の結束を崩す策略がある」(同)

プーチンはウクライナに抵抗をやめさせることが勝利への大きな一歩になると考えている。バイデン、ゼレンスキー両氏の間にはすでに隙間風が吹き始めている。ウクライナへの米国の軍事援助のペースと規模、バイデン氏の平和サミット欠席にゼレンスキー氏は不満を募らせる。

バイデン氏とゼレンスキー氏は 13 日、ウクライナの国防力と抑止力を長期的に強化する合意に署名し、結束を強調してみせた。武器弾薬の提供、情報共有の拡大、ウクライナ軍の訓練、ウクライナの国防産業基盤への投資、強力で持続可能なウクライナ軍隊の構築を約束した。

しかしバイデン氏は戦争のエスカレートを恐れている。シンクタンク、英国王立防衛安全保障研究所(RUSI)のマーク・ガレオッティ上級研究員は、ベルリンを拠点にする経済メディア、bne IntelliNews に「西側はウクライナについて真剣に話し合う必要がある」と寄稿した。

■ 西側には勝利や敗北についての共通認識がない

「戦略策定を妨げる大きな問題となっているのは、西側に『勝利』や『敗北』が実際に何を意味するのかについて共通認識がないことだ。ロシア軍の現有戦力は数多く能力も決して低くはないが、拙劣な侵攻以来、大幅に戦力が低下している」(ガレオッティ上級研究員)

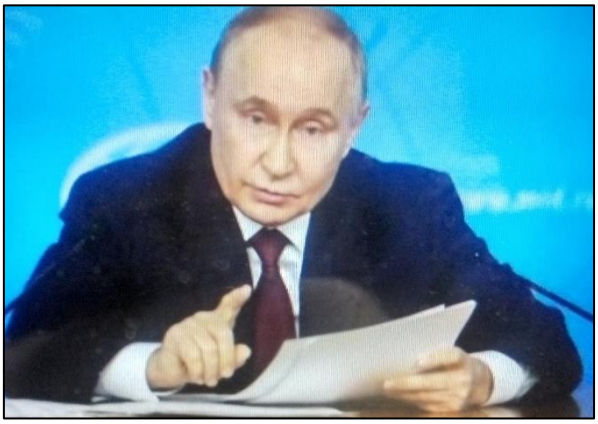
ウクライナが領土と主権をすべて取り戻したいと望むのは当然だ。しかし西側諸国の立場はウクライナと同じではない。「多くの政府はいかなる解決もキーウの譲歩を伴う可能性が高いことを理解して

いる」というガレオッティ上級研究員はこんな声を耳にした。
「いつかロシア人とウクライナ人の双方が交渉を始めなければならない。つまり双方が譲歩しなければならないということだ。私たちの仕事はウクライナ人ができるだけ少ない譲歩で済むようにすることだ」(米政府高官)
プーチンはウクライナ国民と西側諸国の忍耐力が尽きるまでウクライナを苦しめ続けることができると信じている。一方、ゼレンスキー大統領の和平案もロシアに白旗を上げろと言っているも同然だとガレオッティ上級研究員は指摘する。

■ 空虚なスローガンに頼るのは長期的には危険

米コンサルティング会社ユーラシアグループ傘下のグローバル・アフェアーズ研究所の世論調査では、戦争終結に向けた交渉に賛成と答えた米国人は 94%、欧州市民は 88%にのぼった。戦争が泥沼化すればウクライナ支援に対する世論は厳しくなり、米欧ではさらに右傾化が進む。
「言葉と現実のギャップは危険だ。非現実的な期待を生み出し、それが満たされない場合に反発を招いたり、政策と世論のギャップをさらに広げたりする恐れがある。ウクライナを巡る争いは今後何年も続く可能性があり、空虚なスローガンに頼るのは長期的には危険だ」という。

【木村正人(きむら まさと)】
在ロンドン国際ジャーナリスト(元産経新聞ロンドン支局長)。憲法改正(元慶応大学法科大学院非常勤講師)や国際政治、安全保障、欧州経済に詳しい。産経新聞大阪社会部・神戸支局で 16 年間、事件記者をした後、政治部・外信部のデスクも経験。2002～03 年、米コロンビア大学東アジア研究所客員研究員。著書に『EU 崩壊』『見えない世界戦争 「サイバー戦」最新報告』(いずれも新潮新書)。



https://news.yahoo.co.jp/articles/9f704cbd96f8e520ab10a38a8d8747b6183dc429/images/000

❸ 険しい停戦実現の道 途上国の支持広がらず ウクライナ平和サミット(2024年6月18日)

【ビュルゲンシュトック(スイス)時事】ウクライナ和平案を協議した平和サミットは 16 日、共同宣言発表にこぎ着けた。
ロシアによる侵攻が長期化し欧米で「支援疲れ」が広がる中、ウクライナのゼレンスキー政権は事態打開に向けた国際社会の結束誇示を狙った。だが、対ロシア関係を重視する新興国の支持獲得は壁に直面。停戦実現への道のりの険しさを浮かび上がらせた。

◇「大成功」誇示

「ウクライナとすべてのパートナーにとって、大きな成功だ」。ゼレンスキー大統領は会議後の記者会見で胸を張った。サミット直前にはロシアの妨害工作で参加が 80 カ国を下回るとの観測も流れたが、最終的に約 100 の国・組織が代表を派遣したためだ。

参加国からも「国際社会と密接に協力し、取り組みを継続する」（岸田文雄首相）、「必要な限り、われわれを頼りにし続けられる」（イタリアのメローニ首相）、「いつまでも頼りにしてほしい」（アイルランドのハリス首相）といった応援メッセージが相次いだ。支援を継続する西側諸国の決意を改めて強調した。

◇残る「支援疲れ」懸念

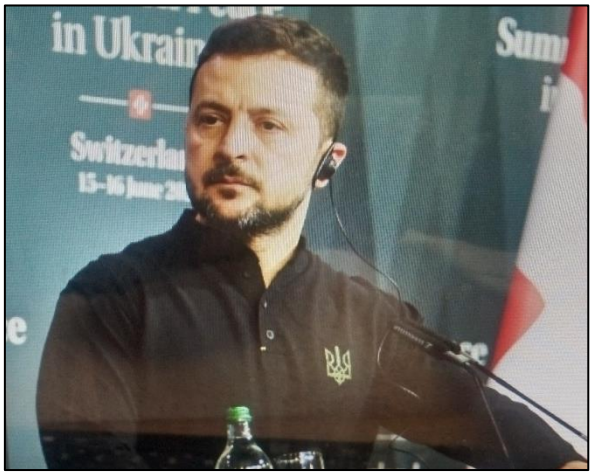
とはいえ、欧米での支援疲れに対するゼレンスキー氏の懸念が払拭されたわけではない。今月の欧州連合（EU）欧州議会選で圧勝したフランスの極右政党・国民連合は、ウクライナ支援よりも国内優先を訴える。ドイツで伸長した極右政党はゼレンスキー氏の独議会演説を欠席。今秋の米大統領選で支援に後ろ向きなトランプ前大統領が返り咲く可能性もあり、欧米での選挙結果はウクライナの命運を左右しかねない。

さらに、ロシアを批判する欧米主導の会議となったことで、中国は欠席。インドや南アフリカ、サウジアラビアなど発言力を増す新興・途上国「グローバルサウス」を代表する諸国も共同声明への署名を軒並み拒否した。ロシアに近い諸国が支持しやすいよう、共同声明にはウクライナの領土回復や戦争責任追及などの文言が盛り込まれなかったにもかかわらず、今後の国際協調に影を落とした。

◇国内でも厳しい見方

そうした中、ウクライナ国内ではゼレンスキー氏に対する厳しい見方が増えている。キーウ国際社会学研究所が 7 日発表した世論調査結果によると、ゼレンスキー氏を「信頼する」と答えた国民は 59%。2022 年 2 月のロシア侵攻開始後で初めて 6 割を切った。反転攻勢の不発、国民からの人気が高かった軍制服組トップの解任、閣僚が絡む汚職事件などが響いているとされる。

本来 5 月だった任期切れ後も職にとどまるゼレンスキー氏について、ロシアのプーチン大統領は正統性を疑問視する発言を繰り返す。国内および国際社会の結束がほころび、ゼレンスキー氏の指導力が一段と弱まるようなら、停戦協議の早期実現はさらに遠のきかねない。



https://news.yahoo.co.jp/articles/9593d4c215c024bf8ca31519eab692cded7eadab/images/000

❹プーチン氏、南ア大統領再選に祝意　良好な関係示唆（2024 年 6 月 18 日）

［18日 ロイター］- ロシアのプーチン大統領は17日、南アフリカ議会で再選されたラマポーザ

大統領に祝意を伝えた。ロシアのウクライナ侵攻を受けた不透明感の中でも、良好な関係が続いていることを示唆した。

ロシア大統領府によると、プーチン氏はラマポーザ氏との電話で、両国の連携をあらゆる面で一層強化するため、共同の取り組みを継続することに期待を示した。

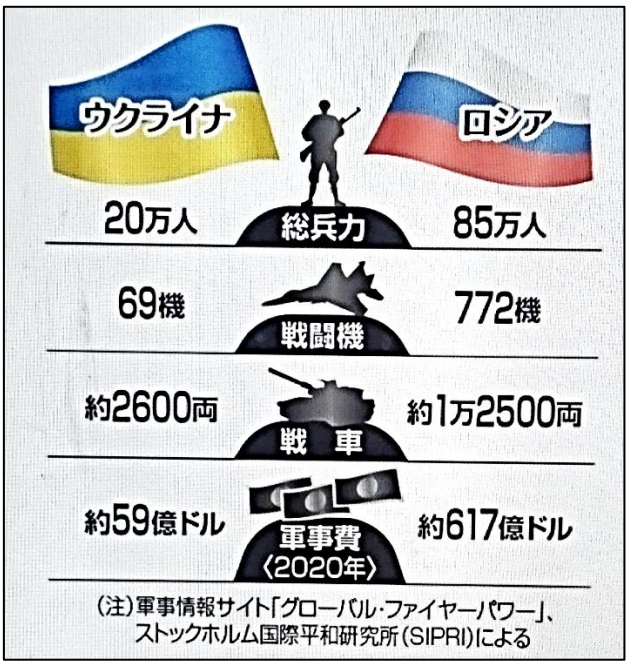
2022年の侵攻以降、ロシアとウクライナはいずれもアフリカ諸国の支持獲得を目指しており、それぞれ外相がアフリカを歴訪している。

南アは当初、ロシアによる侵攻を非難したものの、その後は国連総会でロシアを非難する決議を棄権するなど、より微妙な立場を取っている。

スイスで先週末開かれた、ウクライナ和平案を協議する「平和サミット」では共同声明への賛同を見送った。

https://news.yahoo.co.jp/articles/d1aa4d6398b2374dc3d65145911a5a08dcffd2d7/images/000

❺ ロシアとウクライナの戦力比較（SIPRI，2024年6月）



https://www.jiji.com/jc/v4?id=graphicukr0001

❻ 不調に終わったウクライナ平和サミット　習近平のしたたかな戦略か？（yahoo Japan，2024年6月18日）

遠藤誉

スイスのビュルゲンシュトックで開催されていたウクライナ平和サミットは、6 月 16 日に不調な中で閉幕した。なんとか共同声明は出せたものの、妥協の産物でしかなく、少なからぬ国が署名を拒否した。注目すべきは、サミットでサウジアラビアやトルコの外相あるいはケニアやチリの首脳などが非常に目立つ形で「ロシアが参加していない会議には何の意味もない」という趣旨の抗議を表明したことだ。

抗議を表明したときの「表情」を見てハッとした。

厳しい表情と激しい口調には、何か確固たるものがある。

いずれも中国とは非常に仲が良い連中ばかりではないか！

奇妙だ･･･。

その違和感は「何かある！」という直感を抱かせた。

ひょっとしたら、この人たちは「刺客」としてサミットに送り込まれ、激しく抗議する場面を全世界に知らせるための役割を担っていたのではなかったのか？

西側諸国の一つであるはずのオーストリアのカール・ネーハマー首相は「この会議は西側のエコーチェンバー（自分と似た意見や思想を持った人々の集まる空間）とまで言っているが、オーストリアさえも、最近中国とは経済協力フォーラムを開催したばかりだ。

習近平に、してやられたか･････！

彼らの発言と中国との関係を、一つ一つ確認せずにはおられない。

◆抗議表明したサウジアサラビアのファイサル外相と王毅外相との関係

ウクライナ平和サミットの全体会議という最も目立つ場面で、サウジアラビアのファイサル外相は、厳しい表情で「信頼できるプロセスにはロシアの参加が不可欠だ！」と強く主張した事実は、全世界の注目を集めた。

ファイサル外相に関しては、6 月 16 日のコラム＜ゼレンスキー大統領はなぜ対中批難を引っ込めたのか？　ウクライナ戦争和平案を巡り＞で述べたように、5 月 31 日に北京で中国・アラブ諸国協力フォーラム第 10 回閣僚級会議が開催され、父親の病気で出席できなかったムハンマド皇太子の代わりに出席し、王毅・中共中央政治局委員兼外相（以下、外相）と会談したばかりだ。

このあと 6 月 10-11 日には、ロシアで開催された BRICS 外相会議にも二人は揃って出席している。

中国ともロシアとも深く関わりながらサウジアラビアは動いているのだ。

となると、ゼレンスキーの要求が激しいので、ウクライナ平和サミットには一応参加しておいて、「むしろ、逆の積極的効果を発揮できるようにしてみてはどうだろうか」という打ち合わせをしたとしても、おかしくはない。

なぜそこまで考えてしまったかというと、写真1と写真2の表情を見比べてみていただきたい。歴然とした差があるのがお分かりだろう。写真2がいつもお馴染みのファイサル外相の表情だ。写真1のような闘志をみなぎらせた顔を見たことがないし、声の張り上げ方もいつもと違う。

この違いにまずハッとしたのだ。「待てよ…」という直感が走った。

◆抗議表明したトルコのフィダン外相と王毅外相との関係

トルコのフィダン外相はウクライナ平和サミット全体会議で、かなり長い時間にわたって厳しい表情で抗議を表明した。長いので一部だけピックアップすると、たとえば「このサミットには、紛争の反対側であるロシアが参加していない。ロシアが参加していれば、実りあるものになった可能性があるが、ロシアの参加していないサミットでは意義がない」と、ゼレンスキーが最初からロシアを排除したことに真正面から抗議を表明した。その上で「ロシアは最近、新たな停戦条件を提示している。その内容がどういうものであれ、停戦に向かおうという意思表示をしていることは重要な一歩であり、かすかな希望だ」とさえ述べて、ゼレンスキーが「ヒトラーのようだ」として拒絶したプーチンの言葉を例に挙げた。

停戦交渉というのは、相手の条件が何であれ、それをぶつけ合うところから始まるのに、最初からプーチンの参加を排除したゼレンスキーに世界のカメラが並ぶ前で抗議したのである。

一方、6月 4 日、フィダン外相は訪中して王毅外相と両国間の「戦略的協力関係」に関して会談している。

やはり中国との接触の場合は表情がまろやかだ。ふだん見ている中共中央管轄下にある中央テレビ局 CCTV で認識しているフィダン外相の表情と重ねて見た写真3の表情は、直感を確信に変わらせていた。

◆抗議表明したケニアのルト大統領と習近平との関係

ケニアのルト大統領はウクライナ平和サミット全体会議で同様に抗議表明をした。スピーチは相当に長いが、その中で「ロシアは今このテーブルに着いているべきだ」、「友人だけの会合であってはならない」、「(ウクライナにとっての)敵も含めた会議でなければならない」として、このサミットに最初からロシアが参加することを排除したゼレンスキーを非難する形となった。

一方、ケニアは中国と一帯一路で固く結ばれており、昨年 10 月に開催された一帯一路サミットにルト大統領が出席し、国交樹立 60 周年記念を祝して習近平国家主席と会談している。

これが同一人物かと思うほど、写真5には敵意に近い闘志があり、周辺にいる人物たちの表情も同様に柔和ではない。

なお、今年 1 月にはケニアのムダワディ外相が訪中して王毅外相と会談し、一帯一路を中心とした戦略的コンセンサスの下、未来を共有する「中国・ケニア運命共同体」の構築を進めることに合意し、共同声明を発布した。

◆抗議表明をしたチリのボリッチ大統領と習近平との関係

チリのボリッチ大統領はウクライナ平和サミットで「チリはロシアのウクライナ侵攻に一貫して反対してきた」としながらも「今日、それがどんなに困難だと見えても、どんなことをしてでもロシアはこのテーブルに着いているべきで、ロシアがいないのはおかしい」と、丁寧ながらも、やはりロシアを最初から排除したゼレンスキーの考え方に異議を唱えた。

一方、ボリッチ大統領は 2023 年 10 月に一帯一路国際協力フォーラムに参加するために国賓として招かれ、習近平と会談している。

特にチリは、拙著『嗤(わら)う習近平の白い牙』の【第七章　習近平が狙うパラダイム・チェンジ】で述べたように、EV に不可欠なリチウム電池製造に関して、そのリチウム鉱石の宝庫の一つであるため、リチウム鉱石の共同開発が、二国間経済協力メカニズムに関する共同声明の中にも盛り込まれてい

る。一帯一路関係だけでなく、中国とチリとの関係は深いのだ。

◆ウクライナ平和サミットを「西側のエコーチェンバー」と称したオーストリアのカール・ネハンマー首相と中国との関係

オーストリアはここ数年、目まぐるしく国家（連邦政府）の首脳が代わっているので首相の名前を間違えやすいが、今はネハンマー（ネ―ハマーとも）が首相を務めている。彼はウクライナを訪問しゼレンスキーとも会っているくらい、ウクライナを支援しているはずだ。その彼がウクライナ平和サミットの全体会議ではなく、会議場外での通りがかりの取材の際ではあるが、「われわれは西側諸国のエコーチェンバー（反響室）にいるようなものなんだよね。つまりさ、全ての西欧諸国とアメリカは、ウクライナで何が起きて欲しいかに関して既に合意している。でも、それだけでは十分じゃないんだよね」と、さらっと言ってのけている。

エコーチェンバーというのは、冒頭に書いたように「ネットなどで、まるでエコーのように自分と似た意見の人たちが集まる空間」のことで、そこで交わされる情報だけが正しい世論だと勘違いし、他の世界が見えなくなってしまう現象を指す。

ウクライナ平和サミットはそのエコーチェンバーに過ぎないと「ウクライナを支援しているオーストリアが言った」のは衝撃的だ。

中国のネット空間で、あまりにこの発言が大きく取り上げられているので、念のためと思ってチェックしてみたところ、今年６月６日に「中国・オーストリア経済協力フォーラム」がウィーンで開催されたばかりだということがわかった。

これはさすがに中国との打ち合わせの下での発言ではないと思ったのだが、ところが、とんでもないツーショットを発見してしまった。オーストリアのネハンマー首相が、なんと、ケニアのルト大統領と仲良くツーショットを撮っている証拠写真を見つけてしまったのだ。もちろん会場はウクライナ平和サミットが開催されていた会議場の一つ。まるで「やったね！」と言わんばかりの表情ではないか。

ということは、ひょっとしたら、オーストリアも含めて、全て「仕組まれたもの」だったのだろうか・・・・・・。

どうしても「お主も、ワルよのう…」という悪代官同士の老獪な「したり顔」が浮かび上がってくる。それは拙著『嗤（わら）う習近平の白い牙』で著した習近平の顔、そのものだった。